

2016年度 市民福祉講座

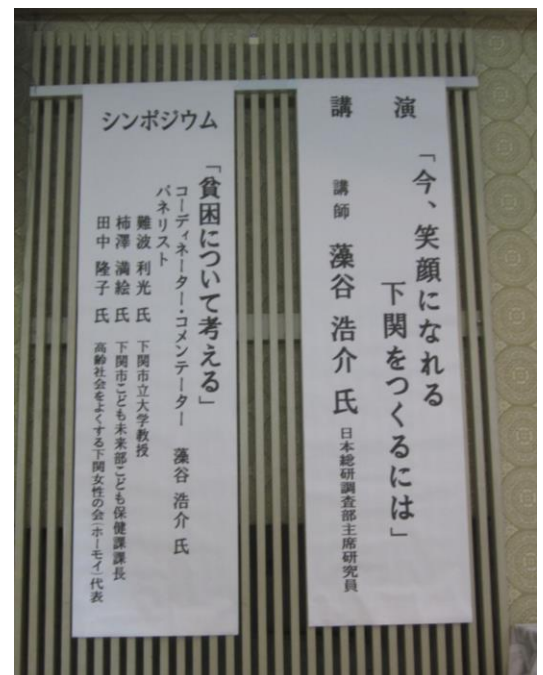
「今、笑顔になれる社会」

講演 ～今、笑顔になれる下関
をつくるには～

2017年1月28日下関市社会福祉センター

講師 藻谷浩介

(株)日本総合研究所 主席研究員



●止められないこと

- (1)今の住民が毎年一歳ずつ歳を取って行くこと
- (2)若者が地域外に就職して出て行くこと

●変えられること

- (1)これまでは一度出て行ったきり帰ってこなかった若者たちを、今度は工夫次第で呼び戻せる
- (2)子育て世代の支援で、出生率を高くできる



●むしろ前向きにできること

- (1)子育てしながら働く若い世代を呼び込める
- (2)無病息災で天寿を全うする高齢者を増やせる
- (3)来訪・滞在・短期定住する外来者を増やせる

などと話されました。2020年ごろから高齢者数が減って行くことも、子育て支援に力を入れられる。東京都・福岡など高齢者で溢れ、高齢者支援が財政難になるだろうとも話されました。

シンポジウム ～貧困について考える～

コーディネーター 藻谷 浩 介

シンポジスト

難波 利 光

下関市立大学教授

柿澤 満 絵

下関市こども未来部・こども保健課課長

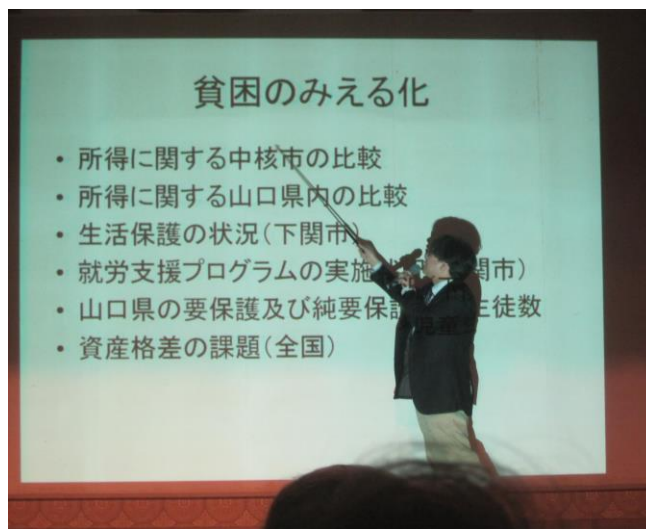
田 中 隆 子

高齢社会をよくする下関女性の会（ホーモイ）代表

「貧困について考える」と題してシンポジウムが開かれました。

「貧困の見える化」について下関市立大学の難波利光教授が所得の面から話されました。

下関市は、同規模自治体では所得が低く、低い所得者割合も多い。下関市は、山口県内では平均的な所得であるが、低い所得者割合は多い。就労はし易くなり被保護者は減少している。しかし、子どもの貧困と言われる状況は悪い。などと話されました。



次に下関市こども未来部・こども保健課課長の柿澤満絵さんが「こどもの現状」について話されました。

- (1)「社会経済的にゆとりがないこと」と「子育て環境」とは、影響し合っています。
- (2)子育ての相談相手は、家族。次に、地域の人です。
- (3)子育て支援者がいないと、不安感や負担感が増えます。
- (4)「地域の人に支えられている」と感じる環境は、あまり変化していません。

(5)地域とのつながりを感じるのは、若い世代で低く、年齢を重ねるごとに、つながりを感じるようになっていきます。

などと話されました。

最後にホーモイの田中代表が「生野きらきら子ども食堂」の現状を話しました。「子どもプロジェクト」を立ち上げ、市民活動としてできることとして





●趣旨・・・地域には様々な事情を抱えた子どもたちが多くいる。地域の子どもの健やかな成長を願い、地域全体で支えて行きたい。

●目的・・・子どもを取り巻く環境を良くし、貧困の世代間連鎖を断ち切る。

●内容・・・生活支援「子ども食堂」など、学習支援、居場所づくり、多世代交流の場、子どもを応援する地域づくり。

「生野きらきら子ども食堂」の運営について話し、15回開催の延べ人数は569人で、

現状の写真を見ていただきました。そして、下関市立大学松本貴文講師の「生野きらきら子ども食堂アンケート調査結果の分析」から問題を抱えている子どもがいる事が分かり、家庭内の関係や不足している子育てに関わっていることが大きい事。生野きらきら子ども食堂は、学校・教育委員会(行政)と家庭の間の橋渡しの働きが大きいのではないかなど役割は大きい。

締めくくりとして、難破教授が「今から10年間は山場で手を打たなければ現状は維持出来ない。」「ご飯3食を食べる習慣をつけることが、人生の生活習慣の基になる」などと話された。

柿澤課長は「子どもの成長や笑顔に喜びを感じ、喜びをともに共有できる“つながり”ある地域社会を構築したい」そしてホーモイの代表が「子どもの貧困は子供のいる世帯の貧困です。子ども・家族丸ごと支援が必要です。地域で支え支えられる地域社会を構築して行く中で行政の働きが不可欠です。共に生きる地域社会を笑顔になれる社会に変えて行こうではありませんか。」と訴えました。

「中身の濃い会でした。」「知らなかった事がよくわかりました。」「皆で協力して行きましょう。」など色々な反応がありました。アンケート結果が楽しみです。

皆で「今、笑顔になれる社会」を構築したいです！

ご協力、ありがとうございました



生野きらきら子ども食堂